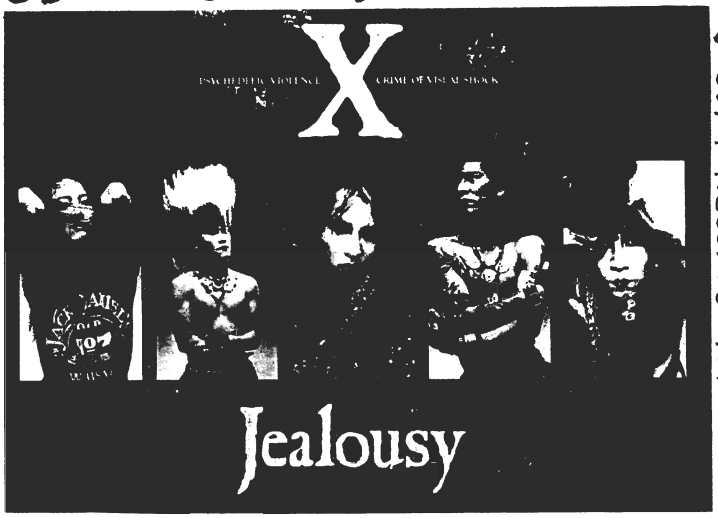
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

35号 1991.7.12
文・編集・発行
恋 怪子

CD: X "Jealousy"



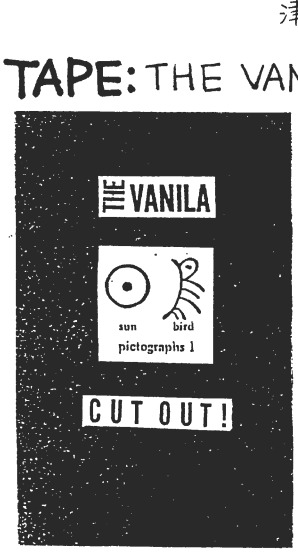
↑SONY RECORDS ¥2800

YOSHIKIのピアノとオーケストラの1曲目「Es Durのピアノ線」から最後の「SAY ANYTHING」まで、このCD1枚50分23秒聞いたあとに残ったのは、いい映画を何本も見たのと同じくらいのすばらしい疲労感と感動だった。50分23秒の間に何回も涙がこぼれた。1曲1曲が全部映画を持っている。生命のありったけをこめて敲いているYOSHIKIのじりたれるドラム!! 2曲目の「SILENT JEALOUSY」など、鬼気迫るどころか鬼気そのもの。2年前に出た前作「BLUE BLOOD」よりずっと聴きやすく、それでいてパワフルなヴォーカル。丁寧に高らかに歌いあげている。それにYOSHIKIのドラムに肉迫するまでになっているギター。すばらしく美しい。
Xの「JEALOUSY」は意味の感じられるアルバム。思いつきで撮ったスナップ写真が何枚も貼ってあるようなアルバムじゃなくて、しっかりした構成のもとに1枚1枚撮影された写真集ともいえるアルバムである。必聴。

ロサンゼルスのノース・ハリウッドにアパートを貸りて、僕達は初めての海外レコーディングをスタートしようとしていた。'90年12月3日。ロサンゼルスに来て10日目の朝、ヨシキは倒れた。生まれて初めて「死にたい」と思ったほどの激痛に首と肩を襲われ、彼はドラムを叩けなくなった。年が明けて'91年5月14日。ヨシキは最後のドラムを録り終えた。その日、本番で彼が叩いた「Say Anything」はわずか2回。精神統一をした後、叩き出した最初のテイクを聴きながら、僕はこの半年間で起きた事を思い出していた。正直なところ、僕は初めて、レコーディング中に涙を流した。それ位に素晴らしいプレイだったし、それ位に重い半年間だった。通常のドラム・レコーディングで行われる、激しい僕とヨシキのやりとりもなく、静かに僕はOKを出した。一時はドラムを諦めかけた彼が、このアルバムを完成させたエネルギー。彼を支えた4人のメンバーと周りの全ての人達のエネルギー。このアルバムにはその全てが刻まれている。

津田直士 "Production Notes" より。

TAPE: THE VANILA "CUT OUT!"



THE VANILA CUT OUT!

A: 訪れる夜のはじまりに
I say I am

B: From Nothing
Good by Red sky
メロディ(桟橋にて)

デモテープとは思えないくらいいい音! 歌もはっきりきこえるし、ギターの音もきれい。
5曲全部いいけれど、私がいちばん好きなのは「訪れる夜のはじまり」です。

テープ¥500 次のライブ 7/19 ACB
↳ 7/19 ACBでも売るとのこと。 ↳ よしやとZULU, SAP-HIPPO, MAGIC CARPET RIDEと。

↑"屋良がとくとくとわくようになりましたって。そう! そういう感じがしますよね、ブルーハーツって。"

JOURNAL: 1991年7月9日

1991年7月9日。THE WAIATSをききに20000Vに行った。開場時間まで駅近くのコーヒー店にいた。この店に入るのは去年の7月11日以来。あの日、ボイラーズがあと1回のライブで活動をやめることをライブ前にもらったチラシで知り、この店でいくらかの時間を過した。ボイラーズのことを想いながら。あれから1年、同じ店にいてやっぱりボイラーズのことを想っていた。開場時間になって20000Vに行くと、まだ2,3人しかいないライブハウスにボイラーズのギターだった人がいた。ここでこの日ライブをやることとバンドの名前がグロウということをきいた。それしか口はきかなかったけれど、想いは私のじからあふれ出て、ガランとしたライブハウスの床に流れていった。
グロウはギター兼ヴォーカル、ベース、ドラム(この人もボイラーズだった)の3人。はじまりのジャーンという音、1年ぶりにきいた。あの音だった。歌よりギターの方が歌っているのをきいていて、ボイラーズは1990年7月26日20000Vでまっ2つになったんだってわかった。ボイラーズのヴォーカルだった人のライブでも失くなったものを感じることがあるし、この日のグロウにもそれを感じた。ボイラーズはまっ2つになったんだ。
…そしてこの日、私はTHE WAIATSをききに20000Vに来た。そうしたらこういうことが起っていた。クライヴ・バーカーの「ウィーヴ・ワールド」の冒頭に書いてあるように、私はなにかに織り込まれていっている。私が私の意志をはっきりもって時間を選択していくとそこに織り込まれていく次元が存在する。そこで生きられる次元が存在する。明確な意志をもつとそこに行ける。

↑"ウィーヴ・ワールド"冒頭部分

第1章 〈綺想郷〉の影

「たとえば、このわたし自身、思うに——本人の口と故郷より美しく映る場所など

I 呼び声

1

物語の起源、などというものはありえない。
最初の一瞬というものなどは存在しえない。いかなる物語であれ、そのはじまりを告げることばや場所、そういったものは、どこにもない。
どんな物語であれ、その糸をたどっていけば、必ずより古い物語にたどりつく。さらにたどれば、さらに古い物語へとつながる。だが、語り部の声が遠くへ、むかしへと遠ざかっていくにつれ、物語同士の結びつきはますます希薄になっていく。なぜなら、それぞれの時代がそれぞれの時代の物語に、その時代においてのみ成立したものであることを望むからだ。
そうするうちに、異端は正当化され、悲劇は笑いものとなる。純粋な恋人同士は感傷の対象となり、魑魅魍魎はぜんまいじかけのおもちゃとなりはてる。
不変のものなどありはしない。内と外、現実と虚構、精神と物質のあいだを、織機の梭は往復し、さまざまな模様を織りなしていく。そのなかでただひとつ共通するものがあるとすれば——その織物のなかにまぎれこんだ一本の金糸が、やがてひとつの世界になるかもしれないということだ。

LETTER: from 宮下智実

私が ブルーハーツを好きになったのは、
高校生の時で、あの頃は何もかもが
ユウウツで 悩みに悩んで たまらない
状況でした。 そんな時、テレビで 元気に
はねまわっている 歌っている ヒロトを見て
「すごく かわいい!」…と 思いました。
それから 私の アコがレの 木村先輩(男)が
仲間と ブルーハーツのコピーを やった って話を
きいてからは 毎日 真剣に ききだしました。
その おかげ 様で 私は ブルハの 歌を 聴く
と 勇気が とく とく と わくように なりました。
私の好きな曲は「人に やさしく」と「街」と「青空」
と「ロクデナシ」が 特別 好きです。
ブルーハーツを 好きに なって、自分が
自分で あれば、人に 何を 言われたって、
自分らしく 生きれば いいんだ なって
思えるように なれました。
親より 今は ヒロトとか ブルーハーツの 奴らに
教えられる方が 自分で 納得する。直接 ヒロトに
教えてくれる ワケじゃなくても… 歌で 語りかけて
くれる、ってコトで… それを もとに ガンバるのだ。!!

LIVE: 春入りマヨネーズ 1991.7.11 渋谷 TAKE OFF 7

1曲目、はじまってすぐにグワーンという勢いを感じた。いいなやっぱり春入りマヨネーズは、と思ってきいていたんだけど、3曲目くらいからなんかぎこちないステージになってきた。でもたてつづけに演奏した後半はまた力ヅよい春入りマヨネーズになった。よかった!! 次のライブ、多分エッグマンこのライブ以降しばらくライブ出演予定とのこと。